R18-G
18歳未満の
閲覧・購入禁止
体験版
DISMEMBER
Alliance

DISMEMBER

Alliance

恵　満　＝　著

ヤルク　＝　絵

目　次

第１章：切断少女と崖っぷち男 ―――――――― ７

※本書は体験版です。

３７ページまで読めます。

登場人物

幅間家の人々

幅間創（はばまそう）　・・・・・・・・・・・・・・・当主，病院経営者
幅間舞（はばままい）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・養子，学生
？？？　・・・・・・・・・・・・・・・次期当主，舞の姉
諏訪野正樹（すわのまさき）　・・・・・・・・・・・・・・・幅間家の執事
世話人（せわびと）　・・・・・・・・・・・・・・・・医療・教育集団

その他の人々

新見史郎（にいみしろう）　・・・・・・・・・・・・・・・元サラリーマン
新見瑞穂（にいみみずほ）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・史郎の妻
西野悟（にしのさとる）　・・・・・・・・・・・・・・・・フリーライター
アイ（あい）　・・・・・・・・・・・手脚と舌を切断された少女

この物語は成人向けです。
１８歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力・強姦などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響および
それらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではございません。

ダウンロード版はタブレット端末等での可読性を考慮し、
印刷版とレイアウトを変更しておりますので予めご了承ください。

第1章　切断少女と崖っぷち男

#1

自宅アパートに『黒い箱』が届いたとき、新見史郎（にいみしろう）は受領書へのサインを躊躇した。本当に自分の名前を書いてもいいのかと戸惑っていると、配達員から白い目を向けられてしまう。

「あの、ここにサインいただきたいんですけど……」

「す、すいません。ボールペン貸してください」

たっぷりと時間を置いて呼吸を整えた後、震える手で苗字を綴る。

怪訝な顔をしていた配達員も次の仕事に取り掛からねばと、台車を押して去っていく。

冷や汗を拭う間も無く、すぐにドアを閉めて鍵をかけ、玄関を塞ぐ『黒い箱』を押してキッチンまで運んだ。

幅と高さが６０センチ程度、長さは１メートル弱といったところで、持ち上げるには骨の折れる重さである。

送り主の名前は事前に聞かされていた通り。伝票には『健康器具』と記されている。

蓋はシボ加工のされたごく普通のプラスチック製だ。

ホームセンターで売っている特大のクーラーボックスそのものである。

息を呑み、覚悟を決める。念入りに巻かれたベルトのバックルに手をかけ、ひとつひとつ外していく。留め金具が爆ぜる音が耳に残った。

最後に蓋を留めていた透明テープを剥がす。

（前金も受け取ってしまっているんだ。この箱が唯一残された希望だというのにここで逃げてど

うする？）

気付けば喉がカラカラに乾いている。コップ一杯の水を飲み干し、落ち着くためにスマートフォンを取り出して待ち受け画面を見る。

一昨年、妻と旅行した時の写真を壁紙にしていた。画像の中で新婚カップルの二人は顔をくっ付けてピタリと並んでいる。どこにでもいる、しかし他の何者にも変え難い幸福な夫婦の姿だ。

史郎は大恋愛の末、妻の実家の反対を押し切って駆け落ちした。その際に住み慣れた街や親しい友人をすべて捨て、新天地に飛び込んで今に至る。

だが幸福は失われつつあった。国内でも数例しか見られない稀有な病魔が妻を襲ったのである。

そのせいで妻は笑顔を失った。死の絶望は容易く人の心を折る。難病の妻を助けられるのは医者だけだが、その医者に仕事をしてもらうには金が必要だ。

そして金を稼ぐのは夫である史郎の役目。しかし、普通に働いていたのではまず手に入らないほどの治療費が必要だと宣告された。あまりに高額で耳を疑ったが医者からは「お気の毒なことですが」と同情されてしまう。

金を工面するには真っ当ではない仕事に手を染めるしかない。

「瑞穂（みずほ）を助けるためなんだ」

『黒い箱』の中身を預かるだけで治療費を稼げる。そういう約束でこの仕事を引き受けた。

どう考えてもまともではない。自分の年収の数十年分が手に入るなんてイカれている。そんなことは史郎自身もよく分かっていたが、他に手はなかった。振り込まれた前金だけで田舎に家が買えるほどだ。この仕事がただのイタズラではないことはもう知っている。

一体、何を預かるというんだ？
雇用主への質問すら許されず今日に至る。
『黒い箱』にはそういった重みが全て詰まっていて、蓋の向こうには答えがあった。
宛名の貼られた蓋をゆっくりと取り去る。
中から立ち昇ってきた空気は一言で表すなら『雌の臭い』だった。
ムワッと、むせかえるほどのフェロモンが濃密に溶け込んで宙に舞って――一瞬だけ、天国に行ったような気分になる。
すぐに意識を取り戻して中身に視線を落とした。
「……え？」
箱に収まっていたのは拳銃でも麻薬でもない。ヤバい代物といってそれくらいしか思いつかなかった。あるいは取引を禁止されている希少動物か。
しかし、生き物には違いない。箱の中のそれは静かに寝息を立てていた。
高価なカメラでも仕舞っているかのように分厚いスポンジがそれの形の通りに窪みを作っている。
息を呑み、中身を注視した。
そこには一糸纏わぬ若い女が寝ていたのである。
（ど、どうなっているんだ!?）
生きた人間が入っているとは流石に想像していなかった。死体ならばいくらか可能性があるとも考えたが。

『黒い箱』を棺に見立て、白雪姫のお伽噺を連想したが全裸という点でぶち壊しである。
寝息を立てる女の顔を確かめてみた。パッと見で十代後半、顔貌(かおかたち)は整っているが地味な雰囲気の持ち主だ。
胸の大きさは特に見事で、スイカみたいなサイズでハリのある双丘が天を突いている。呼吸に合わせてたわわに揺れ、ぴんと尖ったピンク色の乳首が悩ましげに円を描く。
その爆乳から肋を経て急激に細くなり、括れた腰へと繋がるラインは芸術的ですらある。程良く肉の付いた腹から視線を落とせば、無毛の恥丘へと続いていた。
剃っているのか、もともと生えていないのか。不毛地帯の女性器からは僅かに肉襞がはみ出していて、生娘ではないことが窺える。
尻肉も並以上の盛り上がりで、触れれば指が沈んでしまいそうだ。
肉感はグラビアアイドル顔負け、容姿も愛らしい。　やたらと長い黒髪を三つ編みにしている点を除けば、テレビか雑誌に出ても鑑賞に堪える。
「いや、これは……」
思わず口元を押さえてしまった。『雌の臭い』は史郎の脳を引っ掻き回している。
強い引力に惹かれて女の裸体をまじまじと見てしまった。ある点が明らかにおかしい。
見間違いではないかと思って、少女を囲うスポンジを退かしてみる。そうやって確認したのだからもう受け入れるしかない。
(これしかチャンスは無い。瑞穂の治療費を払うためには……)
箱の中身を預かる。

ただそれだけの仕事。
「けど、どうして……？」
人間が中に入っているのに、箱は幅と高さが６０センチ程度、長さに至っては１メートル弱しかない。
普通は収まるわけないのだ。
中で寝ている少女は二の腕より先に何も無い。
足の付け根から先も無い。
少女は四肢が欠損していた。

＃2

『もしもし』
「西野さん、助けてください」
『おぉ、新見か？　荷物、受け取ったか？』
「その荷物が問題なんですよ……」
史郎が電話した相手は、今回の仕事を紹介してくれた西野悟である。フリーでライターをやっているという胡乱な人物だが、史郎にとっては何度も世話になっている恩人だった。
アパートのベランダに出て、なるべく『黒い箱』から離れて話す。中の少女は未だ寝ている。一体、

どんな神経をしているのか想像できなかった。
『問題って、そりゃヤバい代物だろうな。報酬が報酬だけに』
「箱に入った人間が届きました」
『なんだ、死体か？』
「生きてます。若い女でした。西野さんは知っていたんですか!?」
スマホのスピーカーからは『あー』と間延びした声が聞こえてくる。西野はたっぷりと時間をかけてから声のトーンを下げてきた。
『詳細は俺も聞かされていない』
「そんな無責任な！」
『怒鳴るなよ。まさか降りたいなんて言い出さないだろうな？』
「それは……」
『前金もらっただろ？　荷物も引き取っちまった。逃げられるわけないだろ』
「け、けど……」
『嫁さんの治療費欲しさに引き受けたんだ。俺がこの仕事取ってくるのにどれだけ苦労したか話そうか？』
「西野さんには感謝していますよ……　けど、預かるにしても箱詰めにして送ってくるなんて……」
『愚痴はあとで聞いてやるよ。で、何が問題なんだ？　その女がナイスバディの美人で浮気しそうだとか？』

「か、からかわないで下さい！」
『めんどくせぇなぁ。問題点だけ言え。お気持ち表明したいだけなら電話切るぞ』
「無いんですよ！　手脚が欠損しているんです！　見た目からして未成年っぽいし……」
『それが問題か。まぁ、そういうモンだと思って預かるしかないだろ』
「自力で動けない人間の介護をしろってことですか!?」
『そういうことだろ。それとお前、マニュアルは読んだのか？』
「え？」
『え？じゃねーよ。預かりものの中にマニュアルが入っているって連絡しただろ。まずはそれを読め』
　頭の中からはマニュアルのことなど完全に頭から抜け落ちていた。
　台所に置いたままの『黒い箱』にちらりと目を遣るが、近づきたいとは思えない。しかし、マニュアルとやらに目を通さなければ何事も進まなそうだ。
「でも、これから瑞穂の見舞いに行くんです。面会時間が限られてるし！」
『1日くらい行かなくてもいいだろうが』
「明日と明後日は検査で会えないんです！　駆け落ちしてこの街に来たから他に知り合いなんていないし、俺が瑞穂を励ましてやらないと！」
『あ〜、分かった。分かったよ。ったく、嫁バカだよホント。とりあえずマニュアル通りやれ。それでも分からなかったら電話してきていいぞ。俺が依頼主に問い合わせてやるから』
「は、はぁ……」

『とにかく、やるしかないんだから頑張れ。じゃあな』
電話を切られてしまった。仕方なく箱の中を探る。少女は裸の胸を上下させるだけで目を覚ましそうにない。
(寝ていてくれ)
マニュアルは蓋の内側にビニル袋に包まれて貼り付けられていた。ちょっとしたカタログみたいな見た目で、紙質も印刷もしっかりとしている。中身はフルカラーだった。図まで入っていて、ちょっとした家電の取扱説明書よりもわかり易くて親切である。
ただし、ページを捲るごとに嫌な汗が噴き出した。
「服を着せてはいけない。拘束用のハーネスを着用させる。脱走防止のためハーネスは台座に固定する。エサは1日に3回、指定のものを指定の分量だけ皿に入れて与える。皿は必ず床に置く。排泄させるときは……」
マニュアルに指示されている少女の取り扱い方は、おおよそ人間の尊厳を無視していた。年頃の娘でなくとも女性であれば一生モノの傷を負いかねない。
それこそペットの飼育指南書のような内容だった。
史郎は息を呑んで『黒い箱』の少女を観察する。
いつの間にか眠り姫でなくなっていた。とろんとした目でこちらを見ている。
「あ」
間抜けな声が出てしまった。
まばたきした少女は史郎に向かって人懐っこい笑みを浮かべる。てっきり、自分の置かれた境

遇に騒ぐかと思ったが全く違う反応だ。
史郎は顔を背けてしまう。一糸纏わぬ異性と見つめ合うなんて、妻以外に経験がなかった。
「あうぅ？」
少女は言葉ともおぼつかぬ何かを口にする。
箱に入れたまま会話するのは気が引けた。
けれど外に出すには少女の体に触れて持ち上げる必要があった。
（マニュアルを読む限り、この子の世話をしろってことなんだろうけど）
なるべく敵意を抱かれぬよう、しかし引き攣った笑みで、少女へ話しかけてみる。
「こんにちは。えっと、僕は新見史郎（にいみしろう）。キミの面倒を見ることになった」
「いぉう？」
「キミ、名前は何ていうの？」
どう呼べばいいかを聞き出そうとする。
しかし、少女は「あー」とか「うー」とか無意味なことばかり呟く。
「もしかして、喋れない？」
「あう」
少女は箱の中で首を縦に振り、肯定した。
それから大きく口を開けて見せつけてくる。ねっとりとした咥内の奥にはピンク色の断面が覗いていた。
喉を塞ぎそうなその物体の正体が、切断されてわずかに残る舌の根だと理解するまで時間を要

してしまう。
（舌が切り取られてる？）
ゾッとして口元を押さえた。箱の少女は両手両脚だけでなく、舌まで無いのだ。まともに喋れないし、自分では動けない。
もし、史郎がこのまま放っておいたら箱の中で死んでしまうだろう。
「キミを箱から出す。触るけど、いい？」
「あぅ」
また首を縦に振った。意思疎通はできるようだ。
少女の両脇に手を入れて持ち上げてみる。四肢がないため普通の人間よりは軽いが力を要した。
ゆっくりと床に下ろしてやると少女は太腿を前に出して座る。腕や脚の断面は縫合されていて肌色に窄まっていた。見慣れぬ光景に、史郎は言葉が出ない。
少女はキョロキョロと部屋の中を見回している。
「あぃ」
「え？　何？」
「あ・い」
何かを訴えているようで、ゆっくりと口を動かして文字と文字を区切っていた。
ここで『あ』と『い』を続ける理由を考えてみる。
「もしかして、キミの名前？」
首を縦に振って肯定すると、少女は嬉しそうに笑う。

どうやら『あい』というのが、この少女の名前らしい。
「キミは、アイって名前かな？」
「うぅ～」
今度は唸って難しそうな顔をし、また『あ』と『い』を連呼し始めた。
舌が無いせいで正しい発音ができないのだろう。
名前であることは肯定して、『アイ』であることには渋い顔をした。
（訳が分からない……）
もう頭のキャパシティに余裕がない。状況の把握に努めるだけで精一杯だった。
どうにか『アイ（仮称）』とコミュニケーションを取ろうとする。
そのとき、スマホにセットしておいたリマインダーから通知が入った。画面を確認すると『妻お見舞い』とあった。

#3

送られてきた『荷物』に手間取ってしまい、妻との面会時間が差し迫っていた。最愛の人を孤独に闘わせるわけには行かない。
見舞いの準備に取り掛かるがキッチンの隅にはゴミ袋が積み上がっていた。中身は冷凍食品の容器と空のペットボトルばかりである。

（収集日は明日だけど、面倒にならないうちにゴミも出しておくか……）
ゴミ袋を両手に持って玄関を出ようとするが、手脚のない女は史郎を追いかけてきた。半ばから欠けた腕を床に突き、爆乳を引き摺りながら這ってくる。
下着すら身に付けていないので乳首の先端が直接擦れ、妙な嬌声を上げていた。無闇に長い三つ編みはその後を追って蛇の如く捩れている。
「大人しくして。僕は二時間くらい出かけなくちゃならないんだから」
「あぁうぅ〜」
舌を切り取られているせいでまともに喋れないが「そんなぁ」とでも言いたいのだろう。
（どうしろと??）
深い溜息を吐いて玄関先に立ち尽くす。
少女は首を持ち上げて史郎の脛に頬を擦り付けてきた。
（まるで犬じゃないか……）
そう感じてしまった自分に嫌気を覚えつつ、マニュアルにあったように皿を用意した。
水の入った皿と、ポテトチップスを盛り付けた皿である。与え方は間違っていないが、『指定されたものだけを食べさせる』というマニュアルの指示は失念していた。
「お腹が減ったならこれ食べて。いいね？」
「あぅ……」
一方的に告げて玄関に鍵をかけた。
悲しそうな目で見られたのが脳裏に焼き付いてしまったが、モタモタしているわけにもいかな

い。
　電車の時間が迫っているのだ。面会は決まった時刻の15分間しか許されていない。ここで乗り遅れたら、その貴重な時間が減ってしまう。ましてや明日と明後日、妻は検査を受けるので会うことができない。。
（駅まで走ればギリギリ間に合う。急がないと！）
　アパート前のゴミ捨て場に寄る。が、両手のゴミ袋を投げ入れる直前に太った老婆が駆け寄ってきて大声を上げた。
「ちょっと、新見さん！　いつも言ってるでしょ!?　ゴミを出すのは朝6時から8時の間！　前の日に出しちゃダメだって!!」
「お、大家さん……　こんにちは」
「こんにちはじゃないでしょ!?　いっつもルールを守らないんだから！　あぁ～、ペットボトルはラベルを剥がして洗わなきゃダメじゃない！　プラスチックのトレイは資源ゴミで……」
　大口を開けて唾を飛ばしてくる老婆に、史郎は顔を歪める。
　この人物は史郎が住んでいるアパートの大家で、近くに居を構えているのだ。よほど暇なのか事あるごとにしゃしゃり出てくる。ゴミ出しに関しては特に厳しい。
「ちゃんとルールを守らなきゃダメでしょ!?　いい年齢して分かってるの!?」
「すいません……」
　ゴミ袋を置いて深々と頭を下げるも、大家の怒りは収まらなかった。そうしているうちに刻限が迫っている。

ちらりと腕時計を確認した。走ればまだ間に合う。
この電車を逃すと今日は妻と話せない。
史郎は唇を噛んで、それから勢いよく頭を上げた。
「大家さん。実はこれから妻の見舞いに行かなくちゃいけないんです！　隣町に病院があって、急がないと電車に間に合わなくて……」
「はぁ？　それとゴミ出しのルール違反は関係ないでしょ？」
「で、でも……」
「はいはい。さっさと持ち帰って。明日の朝にちゃんと出し直して」
同情を買うのに失敗し、焦りは怒りへ移行した。
この老婆には人の心がないのか？
病気で苦しんでいる妻に会いに行くのになんで邪魔をするんだ？
渦巻く感情は一気に収束して、史郎は行動に移る。
片眉を吊り上げている大家の横をすり抜け、ゴミ捨て場のネットの中に袋を放り込む。
「あっ……」
「すいません！　帰ってきたらちゃんと出し直しますから！」
「ま、待ちなさい！　ゴミ出しのルールは……」
まだ何かゴチャゴチャ言っているが、その声もすぐに聞こえなくなった。
（急げ！）
アパートから駅まで走って、改札を抜けた史郎はどうにか目的の電車に滑り込んだ。

＃4

傾いた陽に照らされて院内の廊下が橙色に染まる。内部を満たす消毒液混じりの病人の臭いは正直に言えば気が滅入ってきそうだ。

史郎は『新見瑞穂』と名前が掲げられた個室のドアをノックし、返事を待たずに中に入る。足音は殺して静かにカーテンを開けた。

ベッドの上では、妻の瑞穂が横になっている。目は開いたままで天井を眺めていた。瞳は光が無く、吸い込まれそうな漆黒で塗り潰されている。

史郎よりひとつ年下だが、ずっと老けて見えた。体重がガクンと落ちて痩せ細った妻は、スマートフォンの壁紙写真とは別人になっている。

「瑞穂、お見舞いに来たよ。ん？」

枕元のテーブルに花瓶があって、白い薔薇がさしてあった。

昨日はそんなものなかったのだが……

「誰かのお見舞い？」

「私、薔薇は好きじゃないのに」

「そういえば、そうだったね。でも瑞穂の実家には薔薇園があったよね」

「だから嫌いなの。死人の臭いがする」

せっかくの見舞いの花だが、史郎は花瓶ごと病室から持ち去って処分した。

「持ってきてくれた人には悪いけど捨ててきた」

史郎が声をかけても、妻の視線は動かなかった。
安っぽいパイプ椅子に腰掛けた史郎は溜息を漏らすのを我慢して、掛け布団の上に置かれた瑞穂の手に触れる。
冷たく、カサついた指先には力が入っていない。
「なにか、あったの？」
唇の間に少しだけ隙間ができると、掠れた声が滑り出てきた。いつの間にか瑞穂の視線が史郎を捉えている。まるで暗がりに堕ちたみたいな、そんな怖さを覚えながら史郎は笑ってみせた。
「なにもないよ」
「嘘。怖い顔してる」
「君が心配するようなことじゃないよ」
「じゃあ、私の病気のこと以外でトラブルがあったのね」
こういうところは非常に鋭い。史郎の声のトーンや細かな表情から探偵のように推理を繰り広げてくる。これは結婚する前からそうだった。
敵わないと悟った史郎は素直に自分の失敗を話す。
「昼間にゴミを出したら大家さんに見つかっちゃってね。大目玉を喰らったよ」
「それだけ？」
「うん、それだけ」
「……」
虚無の瞳は未だに史郎を捕らえている。体温が下がるのを感じつつ、妻の指を強く握った。

本当は、説明できないような出来事があった。四肢切断された少女の姿を思い浮かべそうになるが、毛取られるのを恐れて大家の醜い怒鳴り顔を思い浮かべて記憶を上書きする。
「そう」
納得してくれたらしく、視線は再び天井へ向いた。
史郎の方を見ようとはしない。ただ指が触れている感触は確かで、しかし体温は失われていた。
「ちょ、調子はどう？」
「変わらない」
「悪くなってないんだよね」
「良くもなってない」
「大丈夫だよ。きっと、良くなる。退院できる」
「……」
励ましは空回りしている。ここ最近はずっとこんな感じだ。
史郎がいくら声をかけても瑞穂は上の空といった様子。
彼女は医者に頼み込んで自分の病状を説明してもらっている。
だから事の深刻さを理解していた。
このまま、この病院にいても治癒する見込みは無い。設備のある大病院へ転院しなければならないが、その後は莫大な金がかかる。庶民の史郎にはとても払えない額だった。
「私、死ぬんだよね」
「そんなことないって。僕に任せて」

「治療費、すごく高いから」
「気にしなくていいよ。なんとかしてみせる」
三度、暗がりを抱えた目が史郎へと向く。
それから瑞穂は大きな溜息を漏らした。
「いいよ、無理しなくたって」
「無理なんかしてないさ」
「でも」
「大丈夫、大丈夫。ちゃんと考えがあるんだ」
「考え？　どんな？」
問い掛けられて返答に詰まってしまった。大金が手に入る当てはあるが、西野からは口外しないようにキツく注意を受けている。
妻には『考え』を話すことができない。曖昧な言葉を繋げるだけに留まってしまう。
その態度は瑞穂を急激に冷めさせた。根拠のない励ましなど、死に面した人間には響かないのだ。
（まずい。瑞穂が呆れている……）
機微を鋭く感じ取った史郎だったが、果たして弁解しても良いものか判断できなかった。
まさか、四肢切断された女の子の世話をするだけで大金が手に入るなんて口が裂けても言えない。
そっと妻の指から手を離して、自分の指紋を見つめる。

手の中には、ついさっき『アイ（仮称）』の肌に触れた温かな感触が残っていた。瑞々しくて、ちょっと酸いた臭いがして……何もかも乾き枯れた妻とは対照的である。
「史郎？」
「え、あ……、あぁ。なんでもないよ。それよりもさ、明日と明後日は検査なんだろ？　その日は面会はできないから次に来るのは……」
「いいよ、無理しなくても。わざわざ電車で来るの大変でしょ」
突き放されてしまい、心に棘が刺さる。
今日、面会時間に間に合わせるために大家から怒られるのも覚悟してゴミを投げ捨ててきた。
そのこと自体はどうでもいい。詳細はボカして「大家に怒られた」しか伝えていないが、それは妻のためだった。
けれど見舞いに来なくてもいいなんて言われてしまうと、心に刺さった棘は徐々に大きくなっていく。
「やっぱり、実家に連絡したほうがいいかな」
「ま、待ってくれ！　瑞穂は実家から逃げたかったんだろ？　だからこうして駆け落ちしたんじゃないか。それを今さら……」
「うん。そうだった。ごめん、忘れて」
（瑞穂は、病気で苛立っているだけなんだ。大丈夫、病気さえ治れば……）
ポケットからスマホを取り出し、壁紙を見る。夫婦で楽しく旅行したときの写真が壁紙になっていたが、遠い夢だったような気がしてきた。

スマホに表示されている時刻は面会時間の終了を告げている。
「ま、また来るから。瑞穂は何も心配しなくていい。僕がなんとかする」
返事はない。妻は無言でじっと天井を見つめたままだった。棘はまた大きくなり、病室を後にする。
帰り際、近くの休憩スペースに入った史郎は、他に誰もいないことを確認すると自販機を思い切り殴った。

#5

病院から出た史郎は駅とは反対の方角に歩いてしまった。いくら進んでも目的地が見えてこないことを不審に思い、引き返したのは15分も後の事だ。余計に歩いたせいで脚が痛い。
電車に乗ってもボーッとしていて一駅通り過ぎてしまい、帰宅には時間を要した。あまりに酷い顔をしていたので駅員から「大丈夫ですか？」と声をかけられる始末だ。
史郎がやっとのことで自宅アパートまで戻ると玄関扉の前にゴミ袋が置いてあった。張り紙がしてあって「ルール厳守」と殴り書きされている。大家の老婆が置いたのだろう。わざわざゴミ捨て場からここまで運んだらしい。なんともご苦労なことだ。
（最悪の気分だ。さっさと寝てしまいたい……）
面倒臭くなった史郎は共用通路にゴミ袋を残したまま、部屋の鍵を開ける。

その瞬間、バタバタと床を蹴る音が聞こえた。
（なんだ？）
電気を点けるとフローリングに水溜りが広がっている。顔を近づけると不快なアンモニア臭が立ち込めた。それ以上、確認するまでもなく小便である。
ここでようやくアイを置き去りにしていたことを思い出す。
「あの子……」
室内を見回すがどこにも姿は見当たらなかった。
だが外まで逃げられるとは思えない。窓の鍵にもドアノブにも手を伸ばすことは叶わない。そもそも腕が無いのだから。
目敏く『黒い箱』の位置が動いていることに気付く。蓋の隙間からは三つ編みの尻尾がはみ出していた。
静かに近づき、蓋を取ると中には例の少女が隠れている。ここに運ばれたときとは違って俯せになっていて顔は見えなかった。
（自分で箱の中に入れる程度には動けるんだな……）
史郎が鍵を開ける音を聞いて逃げ込んだのだろう。半ばから手脚がないというのに蓋まで閉めるとは器用なものだ。しかし、長過ぎる三つ編みまでは隠せなかったらしい。
「あぁ～、うぅ……」
少女は申し訳なさそうに呻いて身体を半分だけ捩り、こちらを振り返る。粗相をして怒られると考えているようだ。

その情けない姿に毒気を抜かれてしまった。酒でもあおって寝てしまいたい気分だったのに、余計な手間が増えている。それでも怖がっている女の子に怒鳴りつけるほど狭量ではない。
（マニュアルには『排泄の面倒を見ること』ってあった。『服を着せてはならない』とも書いてあったからオムツはダメだろうし、そもそもこの子は自力でトイレに入ることもできない……）
病気になったばかりの妻のことを思い出した。最近の素っ気ない態度とは全然違う。世話をする度に申し訳なさそうにしていた。
史郎にとって、愛する人の面倒を見ることなどまるで苦にならない。そのことを伝えると妻は泣いてしまった。
（放ったらかしで出かけてしまった僕に責任がある）
この少女は仕事上の関係でしかない。けれど史郎の助けを必要としている。
アイを放置してしまったミスを認めることにした。今日はミスしてばかりで、ひどく気落ちしている。
西野には呆れられるし、大家には怒られるし、妻には冷たくあしらわれてしまった。マイナスの気持ちのまま1日を終えたくない。
気持ちを切り替えようと緊張を解いた。頬を緩ませて軽く目を瞑る。
「お漏らししたことは怒ってないよ……」
「あぅ？」
「ごめん。僕がちゃんと面倒みなきゃいけないのに」
「あーぅうう、ううう？」

少女は意外と言わんばかりの顔をして仰向けになる。
「触るよ」と許可を取ってから、彼女の身体を持ち上げて箱から出した。
それから「拭いても大丈夫？」と確認をとって、少女の同意を得てから股間をタオルで拭ってやる。
粗相の始末も手早く済ませ、ついでにキッチンの床に置いた皿を確認した。水は減っていたが、ポテトチップスは手をつけた様子が無い。
キョトンとする少女を尻目にマニュアルを再び手に取り熟読した。頭は疲れているが、不思議な使命感に支えられて一通りに目を通す。
すると、とんでもないことが発覚する。
「足りないものがあるじゃないか……」
手脚の無い少女が勝手に動かないようにするため、拘束する必要があるらしい。
高所作業用のハーネスを取り付けて、鉄パイプで作ったフレームに吊るしておかなければならないそうだ。
しかし、肝心のハーネスも鉄パイプも『黒い箱』には入っていない。
おまけに少女に与える特定の食品とやらも見当たらなかった。出掛け前だったとはいえ、マニュアルを流し読みした時には全く気付けていない。
どうしたものかと困っていると呼び鈴が鳴り、また運送業者が訪ねてきた。
「すいません、今日の午前中指定だったんですが遅れてしまって……」
そう言って差し出してきたのは『黒い箱』よりもさらに大きな荷物だった。マニュアルにあっ

た鉄パイプとハーネス、それに缶詰がタイミングよく届く。
史郎はそれらを指示された通りに組み立てた。布団やテーブルが邪魔になるので部屋の隅に避けて、同封されていた工具を使って作業を終える。
次にハーネスを取り付けようとすると少女は嫌そうな顔をして、おさげ髪を振ったが「我慢して」と言い聞かせて装着する。
狭いアパートの半分ほどが鉄パイプのフレームに占拠され、そこに手脚のない少女が吊るされた。ハーネスとフレームを繋ぐ金具がガチャガチャと鳴り、少女の身体がブランコのように揺れる。
ハーネスが巻き付くことで、ただでさえ大きな胸が張り出して余計に強調されている。腰回りも同様だ。全裸よりもずっと艶かしく、何よりも吊るされているという異常な状態に史郎は息を呑む。
「うぅあぅ〜」
「ご、ごめん。マニュアルに書いてある通りに面倒を見なくちゃいけないんだ」
ジト目で睨まれてしまった。こうして接していると意外に感情豊かである。
三度、マニュアルに目を通すと食事をさせるときと眠らせるときは降ろしてもいいそうだ。
「食べるときと寝るときは降ろしてあげるから我慢してね。あと、トイレに行きたくなったら教えて」
「うぅ……」
これでいいだろう。やるべきことはやった。

途端に史郎の意識は薄れていく。精神的にも肉体的にも疲労が限界に達していた。
部屋の隅に丸めた布団を枕にして、天井を仰いで数秒後には意識が完全になくなっていた。

史郎は恐ろしい夢を見ていた。
妻の病気がすっかり治ったという夢だ。良くなることをずっと望んでいたのに、家に帰ってきた妻は浮かない顔をしている。
以前の生活には戻れなかった。
瑞穂は荷物をまとめて手狭なアパートから去っていった。いざというとき、夫である史郎がまるで役に立たなかったという理由で離婚されたのである。あれだけ懸命に尽くしたのに、その気持ちは届いていなかった。
もう真っ直ぐ歩くことすら叶わない。文字通り目の前が真っ暗になった。何も見えないし何も聞こえない。そもそも前に進む必要があるのかすら判別できない。
愛する妻を失った史郎は果ていない闇の中、ずっと座り込んだままだった。、そのうち無力に打ちひしがれ、自死を選ぶ。
ここまでが悪夢の内容である。後頭部に布団の感触があったので現実に戻ってきたのだと理解できた。
ぼんやりと意識を取り戻した史郎は自省する。きっと、見舞いのときのだらしない態度が原因だろう。

（言ってやれなかった。治療費を稼ぐアテがあるって）
既に前金も貰っている。だったら、その金を見せればよかったのか？
いや、そんなことをしたらどうやって大金を手に入れたか聞かれてしまう。説明するわけにはいかないし、余計に不信感を抱いただろう。妻を励ますことだけが唯一の正解だった。
そう自分に言い聞かせても心は曇ったまま。
既に陽が落ちて室内は暗い。カーテンの隙間から外の灯りが差し込んでいる。
ふと、股間に――正確にはその先端の亀頭に、熱い吐息がかかる。
「えっ？」
陰茎がくすぐったくて間抜けな声が漏れた。
亀頭が風に晒される感覚に戸惑い、慌てて視線を向けると黒い影が太ももの間で蠢いている。
指先まで硬直してしまったのは、自らが置かれている状況の滑稽さからだろう。
「あ～ぅん♡」
「えっ？　ちょっ……」
脚と脚の間に、アイがいたのだ。
「何やってるんだ!?」
「あ～うぅ♡　ちゅっ♡」
史郎を上目遣いで見ながら、アイはこれ見よがしに肉棒の皮に吸い付く。唇でよく揉みながら、けれど歯は立てずに陰経を吸引してくる。
「すぅ～♡　んちゅっ♡　ちゅぱっ♡」

（舌が無いから、舐められないのか……　いや、それよりも……）
寝落ちする前に、アイの身体をベルトで吊し上げた筈だ。それが今は史郎の股間を弄っている。一体、どうやって金具っを外して降りてきたのか。
「んんっふぅ♡」
「や、やめてくれ！　息を吹きかけるなって！」
こそばゆそうな史郎の反応にアイは満足した。丹念にペニスにキスを繰り返し、唾液で濡らしていく。
豊満な肉体の少女に迫られているのだ。肉棒は応えるかのように天の突いている。密着されているせいで、熱を帯びた皮膚の下に極上の柔らかい肉が詰まっているのが分かる。
アイは既に汗ばんでいて息も荒く、興奮した様子が伝わってきた。
（す、すごい身体だ……）
唾を呑み込んだ史郎は、あらためてアイの媚肉に見惚れてしまった。
グラビアアイドル顔負けのプロポーションは、手脚を欠いたせいで奇妙な魅力と魔力を秘めている。
嫌でも妻と比較してしまう。痩せていて、セックスのときですら淡白だった妻。それとは真逆で肉感たっぷりで情熱的なアイ。
一瞬、気の緩みを自覚した。これではいけないと立て直そうとした矢先、アイは丸く口を開けて亀頭を頬で咥え込む。
「あふぅ♡」

「ぃいっ!?」
ぬめった温かさに包まれ、史郎は情けない声を上げてしまう。
じっくりと頬と亀頭の間の空気を抜くようにアイは呼吸し、先端が唾液に包まれる。吸引の気持ちよさは例えようがなく、それだけで射精してしまいそうだった。
(す、吸われるぅ!? 早く引き剥がさないと!!)
アイの肩へと手を伸ばし、押し退けようとした途端、ペニスに痛みが走る。
「いぃっ!?」
「んぐぐぐう」
見透かしたかのようなアイが、亀頭を軽く噛んだ。
痛い筈なのに、甘噛を繰り返すうちに身体の緊張がほぐれてしまう。
ペースは完全に握られてしまった。
アイがゆっくりと頭を下げていくと、史郎のペニスが喉奥に達する。そこから激しくストロークし、肉棒全体をシゴキ始めた。
(の、喉! 喉でシゴカれてる!?)
吸引と合わせて、これまで味わったことがないほどの刺激が脳を焼いていく。射精を堪えるだけで——そもそも堪える意味があるのか——手一杯だった。
最早、抵抗するつもりなんて無い。ただただなされるがままに快楽に溺れてしまう。
「んぐっ♡ んんじゅぼおっ♡ んん♡」
下品な水音と矯正がアパートの一室に響く。

やがて、アイの情熱的な奉仕に応えるかのように史郎は彼女の頭を掴んだ。自ら腰を振って握られたペースを取り返そうとする。
「あんんっ♡　んぷぅっ♡」
「くそっ！　こんなにエロい身体して！」
「んじゅぶぶっ♡　んん♡　んふぅ♡」
強引にペニスを前後されてもアイは苦しそうな様子を見せない。それどころか史郎の動きに合わせてくる。
鈴口から溢れた我慢汁がどんどん吸い出され、忍耐は限界に達した。
「んふふっふっ？」
多分、「イッちゃう？」と聞いているのだろう。
陰経を頬張っている上、元から満足に喋れないアイの言葉だが簡単に推測できた。
仄かな悔しさと、達してしまいたいという欲望が入り混じって史郎は無言で頷く。
するとアイは頭の動き止め、頬肉を波打つように動かして射精を促した。
緩から急、急から緩とバリエーション豊富なテクに翻弄され、史郎は最後に「うっ」と小さく呻いただけで射精してしまった。
白濁も躊躇なく口に含み、ゆっくりと頭を離したアイは妖しく笑っている。
それから口を大きく開いて、口内に溜め込んだ精液を見せつけてきた。
ご無沙汰だった史郎のそれはドロドロに濃く、ねちっこく少女の唇の端から垂れていく。
「あ～♡　ごくんっ♡」

熱に浮かされ、腰を抜かした史郎の前でアイは精子を丹念に呑み込む。
それから手脚の無い身体で史郎に寄り添ってきて、あっという間に寝てしまった。